

II-4

造血器腫瘍による脊椎の圧迫骨折の疼痛に対する経皮的椎体形成術

白杵憲祐¹、田岡和城¹、仲宗根秀樹¹、浅野大樹¹、中村文彦¹、木田理子¹、伊豆津宏二¹、
浦部晶夫²、杉山彩子³、町田 徹³、中川雅之⁴、大瀬戸清茂⁴

NTT 東日本関東病院 血液内科¹、同 予防医学センター²、同 放射線科³、
同 ペインクリニック科⁴

【目的】経皮的椎体形成術 (Percutaneous vertebroplasty; PVP) は、脊椎の圧迫骨折に対して、除痛を目的に、CT ガイド下に経皮的に金属針を刺入して病変部に骨セメントを注入する方法である。造血器腫瘍による脊椎圧迫骨折の疼痛に対する PVP の効果を調べた。【方法】脊椎の圧迫骨折の疼痛により歩行が困難となった多発性骨髄腫の 2 例と悪性リンパ腫の 1 例において PVP を行った。【結論】1 例目は 76 才の男性で、1999 年発症の多発性骨髄腫 (IgG、
型) で、腰痛のため歩行困難、臥床状態となり、L1-3 の圧迫骨折を認め、放射線治療を行うも疼痛は軽減されず、臥床状態であった。そこで同部位に PVP を施行し、疼痛は軽減して翌日にはコルセットの装着にて歩行が可能となった。2 例目は 64 才の男性で、腰痛のため歩行困難となり、Th10 と L1 の圧迫骨折を認め、PVP を施行し、除痛が得られて翌日には杖歩行が可能となった。その後、精査の結果、多発性骨髄腫 (IgG、
型) と診断し、化学療法を行っている。3 例目は 71 才の男性で、腰痛のため歩行困難となり車椅子が必要となり、Th11、L3 の圧迫骨折を認め、PVP を施行した。翌日には歩行可能となり、その後の全身精査で悪性リンパ腫と診断し、化学療法を行っている。【結論】PVP は放射線治療にくらべて即効性であり、有用と考えられた。